図書館だより

２０１９年
11月号
2019 年 11 月 1 日

今日から11月です。みなさんはどんな秋を過ごしているでしょうか。

日本中が熱い声援を送ってきたラグビーワールドカップ2019も残しは今日の3位決定戦と、明日の決勝戦の二試合となりました。初めは、「スクラムって何？」「トライって何？」と思いながら観ていた人も選手同士の果敢なプレーを観ている内に興味を持ち始めたのではないかと思います。運動が苦手でもスポーツ観戦は楽しいものです。来年にはオリンピックも開催されることですし、この秋は「スポーツの秋」ならぬ「スポーツ観戦の秋」もいいですね。また、紅葉を眺めながら秋の深まりを感じたいという人は、紅葉の名所を色々とめぐってみるのもよいでしょう。同じモミジやイチョウでも庭園や寺院、山など、見る場所によって雰囲気が変わりますから、自分の一番グッとくる好みの場所を見つけてみるのも楽しい秋の過ごし方です。ライトアップさせた紅葉も気になるところ。

＊ルールを知れば、もっと楽しくなる＊

783-ナ 『ラグビーのルール　超・初級編』　中野 良一 ／ 木谷 友亮 ‖ 著
ハーバーコリンズ・ジャパン

これ以上ないくらいシンプルにラグビーのルールがまとめられています。「これだけでわかるの！？」と思ってしまうほどですが、読んでみると、確かにラグビーの試合を観戦していてわからなかったことに納得の答えが見つかります。あの時どうして反則になったのか、このポジションの人の役割は何なのか、レフリーのあのポーズは何を意味していたのか、と疑問を持った人はぜひ読んでみてほしいです。また、ワールドカップを機にラグビーを好きになった人の入門書としてもきっと役立つ本です。キシボーイという可愛らしいキャラクターがいい味を出していて、そこも見どころです。

＊本を開いて、紅葉めぐり＊

748-ミ 『京都もみじ散歩』　水野 克比古 ‖ 著　光村推古書院

春の京都もいいけれど、秋の京都の美しさもまた格別です。紅葉に染まる景色を楽しみに国内外から多くの人が京都を訪れます。実際に足を運ぶとなると遠い場所ですが、本を開けば、京都はすぐそこ。開いた先には、古都の景色と紅葉が生み出す絶景が待っています。参道を覆う紅葉、坐(ざ)して望む庭園の紅葉、鳥居や五重塔を彩る紅葉、日没後のライトアップされた紅葉、どれもが思わず言葉を失って見入ってしまうほど美しく、心を豊かに満たしてくれます。時間を忘れて、じっくりと紅葉に染まる京都を巡る旅を楽しんでください。

おはなし会

★11月21日(木)15:10～　図書館　テーマ『秋』

秋ももう終わりの季節、肌寒さを感じてさみしい気分になってませんか？心に染み入る詩にほっこりした気持ちを思い出させてくれる絵本が、あなたの気持ちを豊かにしてくれます。ぜひ、味わいに来てください。

今年の図書館と県民のつどいにやってくるのは！？

12月15日(日)桶川市民ホール・埼玉文学館で行われる『図書館と県民のつどい』は図書館や読書に関心を持ってもらうための様々な企画を催す県内最大の図書館イベントです。今年の記念講演の講師をされるのは、直木賞候補に選ばれたこともある埼玉県出身作家の須賀しのぶさんです。『本と埼玉と私』をテーマにどんなお話をしてくださるのでしょうか。楽しみですね。こちらの記念講演は、事前申し込みが必要です。詳しくは『図書館と県民のつどい』サイトを見てください。その他、中学生によるビブリオバトルやオリジナル缶バッジのもらえるスタンプラリーなど気になる企画が満載です。

913.6-ス 『また、桜の国で』　須賀 しのぶ ‖ 著　祥伝社

人類史上最大の戦争とされる第二次世界大戦。この戦争の始まりとされるのはドイツのポーランド侵略です。物語は、大戦が勃発した時代のポーランドを舞台に、国を超えた人々の深い結びつきが描かれています。首都ワルシャワの日本大使館に赴任したロシア人の父を持つ棚倉慎、ドイツに生まれたユダヤ系のカメラマン　ヤン・フリードマン、新聞記者のアメリカ人レイモンド・パーカー、３人の青年は運命に導かれるように巡り合い、この大きく残酷な戦争の中で、傷つき、苦しみながら、自分という人間の核となるものを見出していく。日本とポーランドが築いてきた関係にも注目です。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

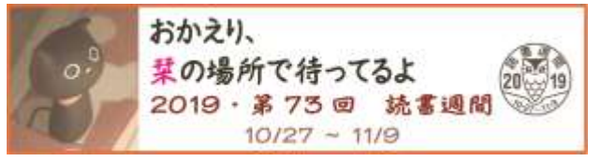
好みというのは年齢を重ねる内に少しずつ変化していきます。でも、中にはずっと変わらず「好き」なものもあります。私にとってそのポジションにいる作家が、森絵都さんです。新刊『**カザアナ**』(**913.6-エ　朝日出版社**)は、新たな森絵都さんに出会えたような気持ちになる物語でした。

時は平安、怪しき力を持った風穴(カザアナ)という者たちがいた。彼らは、空や石、虫や鳥など、人にあらぬものと念をかよわせることができた。その力は重宝され、風穴たちの人気は過熱し、悲劇を生む。

一方、未来の日本では、国の規制が厳しくなり、ドローンによる監視に人々は息苦しさを感じ始めていた。そこで暮らす中学生の里宇とその家族は不思議な力を持つ庭師たちと出会う。

途絶えたはずの風穴の血筋を持つ者と、ちょっとだけ他の家族よりタフなこの一家の出会いによって、息苦しくなってしまった世の中にどんな風穴が開くのか、みなさんも覗いてみませんか。　【今井】

２０１９年の読書週間は



10月27日（日）～11月9日（土）は読書週間です。戦後まもない1947年から始まった読書週間は令和になっても続いていきます。時代が変わっても、本は人々の生活の中で、心を癒し、支え、感動をもたらしてくれる存在であり続けることでしょう。今年の標語は『おかえり、栞の場所で待ってるよ』です。この標語には作者の「日々の時間と環境は、時には私を置いて行ってしまうほど早く過ぎ去ってしまうときもあるけれど、ほっと開いた本の世界は、私の帰りを待ってから進んでくれる」という思いが込められています。本は急かさず、いつでもどっしりと続きを読みにくる人たちを待ってくれています。「読まなきゃ」ではなく、「読みたいな」と思った時に自分ペースで心ゆくまで読書を楽しんでください。

ここからは今年の標語にちなんで、「〇〇が待っている本」を色々と紹介したいと思います。

安らぎのひとときが待っている本

なんてかわいいのだ。ああ、なんて、なんて、なんて。

914.6-カ 『今日も一日きみを見てた』　角田 光代 ‖ 著　角川書店

『八月の蝉』や『紙の月』などの著者でもある作家の角田光代さん。犬派の角田さんが飼うことになったのは、なんと猫。不思議なご縁で角田家の一員となった猫はトトと名付けられます。気まぐれで、つーんとすましているか、寝ているか、猫に対してそんな印象を持っていた角田さんでしたが、トトとの暮らしの中で、猫のイメージがどんどん変わっていきます。実は遊ぶのが大好き、聞き分けがいい、寛容、人見知りをしない、など発見の連続。その度に角田さんのトトへの愛が深まっていくのが伝わってきて、読めば読むほど、ほっこりします。猫派の人も犬派の人もきっとトトの愛くるしさに心を奪われずにはいられないでしょう。

かなえたい願いのリストの長さを測る

E-ク 『はかれないものをはかる』　工藤 あゆみ ‖ 著　青幻舎

著者の工藤あゆみさんはヨーロッパ、日本で活躍するアーティストで、ペン画に詩を添えて表現しています。その絵は見るほどに味わい深く、心を惹かれます。この本は書名のとおり、はかれないものがたくさん登場します。恋のにわか雨だったり、誰も何も傷つけないジャンプの高さだったり、なにかいいことが降ってきそうな角度だったり、自由な発想におもしろさを感じます。こんな風にはかれないものをはかってみたら、その目盛りにはどんな数字が表れるんだろうと想像していると、日常を離れ、ひとりで静かな時間に浸ることができます。読み終わった後、気持ちがスーッと穏やかになっていることを実感すると思います。

おいしいごはんが待っている本

江戸っ子は一流の「素材グルメ」だったのです。

383-ナ 『江戸の食ごよみ』　永山 久夫 ‖ 文・絵　廣済堂出版

ユネスコ無形文化財にも登録された和食。その原点と言われるのが江戸の食文化です。江戸時代が始まったのは今から400年以上も前の1603年。江戸に暮らす人々は、どんなものを食べていたのでしょうか。今のように季節に関係なく、食材が手に入るのは便利ですが、冷蔵庫などなく、獲れたての新鮮な季節のものを使って作られた江戸の料理からは、日本の豊かな食文化を知ることができます。また、それと同時に、江戸っこの暮らしぶりも見えてきます。

つくだ煮は参勤交代で全国に広がった江戸名物だとか、江戸っ子は甘いものが大好物だとか、焼き芋が全盛の時代を迎えたとか、おもしろい話が盛りだくさんです。

たった一行でも、縁があったら必ず辿り着いてくれはる。

913.6-カ 『鴨川食堂』　柏井 壽 ‖ 著　小学館

東本願寺を背にして、広い烏丸通を渡ると正面通に至る。そこを歩くと、店じまいした後のような家に辿り着く。看板もないそこが「鴨川食堂」だ。宣伝は、雑誌に載せた〈食、捜します〉という一行広告だけ。それでも、その言葉に導かれ、目印のない店を目指して、様々な人が鴨川食堂へやってくる。

彼らが捜しているのは、思い出の味。奥さんが作ってくれた鍋焼きうどん、旦那さんが作ってくれたトンカツ、プロポーズの時に食べたビーフシチュー、おじいちゃんが食べさせてくれたナポリタン。大切な思い出の味をもう一度食べたいという思いを「鴨川食堂」の料理人で元刑事の鴨川流（ながれ）と、娘のこいしが叶えていく。流が再現した思い出の味を口にした人々はどんな思いを抱くのでしょう。

好きだったのは、メレンゲと、「レモンパイ」という甘酸っぱい響きの名前だ。

914.6-モ 『レモンパイはメレンゲの彼方へ』　もりした いづみ ‖ 著　集英社

昔、絵本や童話を読んでいる時に、「おいしそう！」「食べてみたい！」という食べ物に出会ったことはありませんか。私は、『小さなスプーンおばさん』に出てきたコケモモのジャムに心を惹かれたのを今も覚えています。この本も「食」にまつわるエッセイですが、登場する食べ物はどれも絵本や童話に結びついています。読んでいると、小腹が空いてくるのと同時に、どんなにおいしそうに描かれているのだろうと絵本や童話の方にも興味が湧きます。あんみつの話を読めば、『あんみつひめさま』が読みたくなり、肉まんの話を読めば、『りきしのほし』が読みたくなる、そんな風に、おいしい食べ物に出会い、さらにはたくさんの本へと繋がっていく1冊です。

胸の高鳴る恋が待っている本

私は、幸せが好きです。

913.6-サ 『君は月夜に光り輝く』　佐野 徹夜 ‖ 著　KADOKAWA

発光病という病がある。原因は不明で、治療法も確立されておらず、完治することは基本的にはない。特徴的な症状は、月の光に照らされると体が光ること。その光は症状が重くなるにつれ、強くなると言われている。僕のクラスには、そんな不治の病にかかった少女がいた。名前は渡良瀬まみず。入院したきりの彼女を知るクラスメイトはほとんどいない。僕もその一人だったけれど、病院への見舞い役を任されてしまう。病室で出会ったまみずは、人懐っこく、一度だけの見舞いのはずが、二度になり、三度になっていく。そして、僕は余命少ないまみずの“やりたいこと”を彼女の代わりに体験することを引き受けるが、その内にまみずへの思いや過去の傷に変化が生まれ始める。

この人は、本当に一瞬で私の目に映る世界を変えてしまう。

913.6-シ 『よだかの片思い』　島本 理生 ‖ 著　集英社

アイコの顔には、物心つく前からアザがある。アイコ自身がアザをそこに存在するものとして受け入れていても、周りの人間はアイコのアザに過剰に反応し、アイコを傷つける。そんな中、出会った飛坂さんは初回からごく自然なふるまいでアイコの心に入ってきた。「この人だったら私の左側を否定しないんじゃないか」そんな思いがよぎる自分に戸惑いながらも、飛坂さんに恋をした自覚を抱く。その思いは彼に会うたび、大きくなっていき、やがてふたりは交際を始める。大学院の研究室に通うアイコと、映画監督として撮影に飛び回る飛坂さんとでは、住む世界が違うことはわかっていたつもりだったけれど、小さなすれ違いが少しずつ重なっていくのだった。

よく、分からない。よく、見えない。自分が分からない。

913.6-ヤ 『まぶしくて見えない』　山本 文緒 ‖ 著　集英社

七生は、泳げない。運動が苦手な分、勉強は頑張っているから成績はいつもトップクラス。だけど、同じクラスの井戸川という男子がどんなテストも飄々(ひょうひょう)と一位を奪っていく。私はこんなに努力しているのにと思うほど、井戸川を毒殺してやりたくなる。そんな井戸川と、受験対策のために通い始めた塾で顔を合わせてしまう。勝手にライバル心を抱いていた井戸川は、話してみると案外いい奴で、印象が変わる。そして、ふたりの距離が縮まっていく、のかと思いきや！！七生の気持ちは、風変わりだけど、ものすごく面倒見のいい樺木先生へと向かっていく。しかし、次第に樺木先生の行動に怪しい動きが見えるようになり…。七生の高校受験と恋は、どうなってしまうのか。

迫力ある冒険が待っている本

今はもはや舵もない。この船にいても今日明日を知れぬ命である。

B913.6-イ 『ジョン万次郎漂流記・本日休診』　井伏 鱒二 ‖ 著　角川書店

ジョン万次郎という名前にみなさんは聞き覚えがありますか。江戸時代の後期に土佐（現在の高知県）の漁村で生まれ、幼い頃に父を亡くした彼は、母と兄弟たちとその日しのぎの貧しい暮らしを送る少年でした。その彼が15歳の時、働きに出ていた漁船が遭難してから、「ジョン万次郎」という呼び名で歴史に名を残すまでに成長する様子を文豪 井伏鱒二が小説にしたのがこの作品です。ごく平凡な少年に待ち受けている波乱な半生は、本当によくできた冒険物語のようでスリリングです。聞いたこともない言語や異国の地にも臆することなく、常に学ぶ姿勢を持って自分の人生を切り開いていった万次郎からは得ることがたくさんあります。

あたしはあきらめない。いつか帰る。それがずっと先のことでも。

B913.6-オ 1-1 『月の影　影の海　上下　十二国記』　小野 不由美 ‖ 著　講談社

1991年から読み継がれる小野不由美さんの十二国記シリーズに今年、18年ぶりの長編新作が出ると発売前から話題になりました。私たちの暮らすこの世界と、地図にない異世界【十二国】とを舞台に繰り広げられる壮大な物語です。主人公は巻ごとに変わり、それぞれが背負わされた宿命に葛藤し、嘆き苦しみながらも成長していきます。『月の影　影の海』の主人公は、平凡な高校生活を送る陽子。彼女は、学校へ現れたケイキと名乗る謎の男によって、わけのわからぬまま、異世界へ連れていかれます。いきなり剣を持たされ、異形の獣と戦わされ、頼みのケイキとはぐれ、もう家には帰れないと言われ、冒頭から災難続きの陽子。しかし、彼女の戦いは始まったばかりなのでした。

よき運命であろうと、悪しき運命であろうと、ただ勇気をもって立ち向かうだけです。

933-ト 『サー・ガウェインと緑の騎士』　J・R・R・トールキン ‖ 著　原書房

14世紀後半に書かれたとされる作者不明の中世アーサー王物語の『ガウェイン卿と緑の騎士』を『指輪物語』で有名なトールキンが現代語訳したのがこの『サー・ガウェインと緑の騎士』です。さらに日本語に翻訳されているのですが、もともとが中世英語、しかも頭韻という語頭に同じ音を持った語を次々重ねて文をつくる韻文で書かれたものなので、日本語訳もなんとなく雰囲気のある文章になっています。「<貪欲>と<臆病>よ、呪われてあれ。お前らが悪さをして、徳がだいなしになるのだ」中世の騎士が活躍する物語が好きな人も、ここではあまり登場しないのですがアーサー王が好きな人も、『指輪物語』の世界が好きな人も、ガウェインの冒険をその文章とともに楽しめると思います。

令和に読んだ本・読みたい本、教えてください

新年号「令和」となって、半年が経とうとしています。みなさんはこの半年でどんな本に注目し、実際に読んでみましたか。

今回の読書週間に合わせ、先生方には「令和になって読んだ本・読みたい本」を教えていただきました。先生たちが興味を持っているのはどんな本なのでしょうか！

302-コ 『インド日記』
小熊 英二 ‖ 著　新曜社

買ったまま読みそびれていた本が整理していたら出てきました。19年越しに今、読み始めたところです。

By 教頭先生

488-イ 『ハシビロコウのすべて』
今泉 忠明 ‖ 著　廣済堂出版

あなたは「ハシビロコウ」を知っていますか？謎を秘めた「動かない鳥」の魅力をぜひご堪能あれ！

By 鈴木伸滉先生（国語科）

913.6-セ 『タイニー・タイニー・ハッピー』
飛鳥井 千砂 ‖ 著　角川書店

私と同年代の人々のどこにでもありそうな小さくて幸せで、明日もまた少しだけ頑張ってみようがなって思わせてくれます。

By 関口先生（数学科）

410-ニ 『世にも美しき数学者たちの日常』
二宮 敦人 ‖ 著　幻冬舎

数学者は「変わった人」と思われがちである。この本を読むと……。やはり変わっている。私は大丈夫です。

By 今井勧先生（数学科）

594-セ 『世界のかわいい刺繍』
誠文堂新光社

世界各国の刺繍を楽しむことができます。手仕事によって作られた美しい模様を眺めていると心が癒されます。

By 山﨑先生（家庭科）

913.6-ヒ 『希望の糸』
東野 圭吾 ‖ 著　講談社

東野圭吾の令和初の新刊が気になっています。“親子のつながり”が描かれているようですが、どんな物語なのでしょうか。

By 染谷孝先生（英語科）

913.6-ヨ 『羆嵐』
吉村 昭 ‖ 著　新潮社

北海道で実際に起きた日本獣害史上最大の惨事が題材となった小説です。熊の恐ろしさに呼吸すら忘れます。

By 加藤裕之先生（社会科）

913.6-ア 『ピーターパン・エンドロール』
日日日 ‖ 著　新風社

平成の間に一番読みかえした本です。令和でもきっと再読すると思います。

By 伊久美先生（国語科）

913.6-ア 『何者』
朝井リョウ ‖ 著　新潮社

令和は、自分の肩書や立場が大きく変わる節目でした。自分が「何者」であるか、違う視点で見つめ直す機会にしたいです。

By 上村実紅先生（体育科）

913.6-ア 『火のないところに煙は』
芦沢 央 ‖ 著　新潮社

ちょっぴりホラーな作品です。本の裏に血の跡がありますが、それがなんなのかは、読んだ人にしかわからない…。

By 染谷凌平先生（社会科）

929-チ 『82年生まれ、キム・ジヨン』
チョ・ナムジュ ‖ 著　筑摩書房

終らない韓国ブームに乗って日本にやってきた少し真面目な本です。国籍や年齢が違えど、深く共感できる1冊です。

By 眞野先生（体育科）

291-イ 『47都道府県の歴史と地理がわかる事典』　伊藤 賀一 ‖ 著　幻冬舎

北海道はなぜ【県】ではなく【道】？市の数が一番多いのは埼玉県？すべての市町村に温泉がある唯一の都道府県は？豆知識です。チョット時間がある時、読んでください。　By 浅見先生（社会科）

913.6-オ 『蜜蜂と遠雷』
恩田 陸 ‖ 著 幻冬舎

『のだめカンタービレ』が好きな人にはぜひオススメしたい本。読んでいるうちにピアノ演奏の音が聴こえてくる気がします！　By 宮本先生（国語科）

B913.6-ア 『終末のフール』
伊坂幸太郎 ‖ 著 集英社

地球滅亡の知らせを受けたとき、人は何を考え、何をするのか。1日1日を大切に過ごそうと考えさせられる1冊です。

By 京極先生（理科）

B932-ウ 『ガラスの動物園』
テネシー・ウイリアムズ ‖ 著 新潮社

昭和の時代から気になっていた本をみかけて購入したのは平成。令和のこの夏に読みました。ガラスの動物は壊れたら元に戻りません。切なさが苦しい程の戯曲でした。　By 鈴木司書